

文化・ジェンダー・セクシュアリティ： 女性エスノグラファーが遭遇する性に関わる問題

倉地 曉美

Culture, Gender, Sexuality : The Problems Experienced by Female Student Ethnographers Akemi KURACHI

1 問題の所在

学問の国際化、情報化に伴って、欧米や日本など先進諸国の議論に限定されがちであった女性問題は、今や全世界的な問題としての拡がりを見せるようになった。加えて、途上国やエスニック・マイノリティ（難民、移民、アフリカ系アメリカ人など）の研究者が活躍する時代を迎え（Mohanty 1991、秋山 1998、フックス 1997）、国際的な学术交流の機会が増えることによって、従来の女性学が、いわゆる西欧の先進諸国の知識人やそれに準ずる一部の特権層に特有の価値観、考え方を強く反映したものであり、それが、多様な国際社会でのジェンダーをめぐる様々な問題や現象を捉える分析の枠組みとして、妥当かどうかという問題が急浮上してきた。むろんそこに、近年の人類学を初めとする異文化研究の諸領域において、西欧中心の言説が厳しく糾弾され、新しい異文化研究の在り方を模索しようとする学問的潮流の影響があることは言を待たない。ともかくも、ジェンダー研究においては、西欧的なエスノセントリズムをいかに乗り越えるかが、今日的な大きな課題となり（関、木本 1996）、日本国内におけるジェンダー研究も、その例外ではない。

従来は「日本の女性」というものが、男性＝マジョリティ対女性＝マイノリティという単純な2項対立の枠組みの中で、あるいは欧米諸国との比較（e.g. アメリカやドイツの女性v. s. 日本の女性）作業の過程で、均質化され、「日本の女性」の中にある様々な差異やそこに働く権力関係などについては十分に省みられることもなかった。しかし日本社会の国際化と日本人の世界進出、トランス・モダニズム、ポスト・コロニアリズムの影響、フェミニストのカルチュラル・スタディーズへの参入などによって、90年代半ばごろから、ようやく女性問題は、エスニック・バックグラウンドとの絡みで盛んに論じられるよう

になってきた（e.g. 在日韓国・朝鮮人女性の問題、農村花嫁、従軍慰安婦、人身売買）。同時にまた、トリン・ミンハ（1995）や、ピョン・ヨンジュなど人種、国籍、ジェンダー、社会的地位など様々な社会的・文化的カテゴリーによって二重、三重、あるいは重層的な周縁に生きる女性が、自らについて語り出したり、あるいは周縁に生きることを余儀なくされた女たちの声をすくい取ろうとして行った様々な試みが日本でも紹介されるようになった。しかし、その一方で、異文化研究に携わる女性研究者自身が、研究対象者との相互作用の過程で遭遇する、性に関わる様々な問題に関しては、未だ隠蔽されたまま、語り出されないことが多い。

本稿の目的は以下の二点である。一つは、フィールドワークの中で異文化接触を体験する女子学生が遭遇する性に関わる問題を明らかにすることによって、彼らが、民族誌学的研究や語学の個人教授などのボランティア活動、チューターリング、アドバイジングなど、長期に亘るインターパーソナルなレベルの異文化接触に携わる際に、考慮しなければならない性の問題とは如何なるものかを明確にすることである。今一つは、単純な一枚岩の強者-弱者の図式には決して還元することができない、文化と性の絡み、及びそこから引き出される権力作用のダイナミズムについて若干の分析を試みることである。

2 三人の女子学生が異文化研究において遭遇した困難

直接的な異文化接触によって長期的にデータ収集を行うエスノグラファーにとって、インフォーマントや調査対象者との間に協力的な関係を樹立し、信頼関係を深めるための交渉を行うことが不可欠となる。むろん様々な阻害要因によって、ラポールの形成が必ずしも順調に行われるとは限らない。調査者

と対象者の媒介言語の能力、各々の性格特性、価値観、とりわけ異文化に対する見方、考え方、両者の社会的・文化的・政治的・経済的な立場とそれによって齎される力関係に加えて、性に関する問題が、関係の形成や維持を妨げる大きな問題になり、ひいてはそれが研究そのものに多大な影響を及ぼす事態に至ることも少なくない。本稿で、あえて性に関する問題という表現を採るのは、以下に掲げる事例を見ても明らかのように、学生たちが遭遇する問題は、単に異性間のみ発生する訳だけではなく、同性間においても多様な形をとって出現する。ここではその文化とジェンダー、セクシュアリティの問題が三つ巴に絡み合う対人的相互作用のプロセスを明示しようと考えたからである。その性に関する問題の実態を明らかにするために、まずは学生への研究指導の過程で筆者が見出した、3つの事例を素描することから始めてみたい。

事例1 20代の白人男性XにインタビューしたAのケース

学部生のAは、日本社会の中で十分なソーシャル・サポートを得られにくい日外国人の異文化生活の実態を明らかにし、彼らが社会的マイノリティとして日本社会の中に埋没して孤立化することなく、異文化学習を円滑に図るための方途を探る目的で、対象者Xを含めた20-30代の男女数名の白人を対象に、1年にわたる長期的な面接調査に従事していた。

Aは、数人の対象者に行ったエスノグラフィック・インタビューの経緯を何度か教室で報告しなければならなかったが、白人男性Xに対するデータは、他の対象者から収集したデータに比して少なく、内容も表面的なレベルのものに止まっていた。Xに対するデータが少なく、インタビューが深まらないことに対して、Aは自分の努力の至らなさや、聴き取り能力の欠如であると説明した。しかし、時間の経過を経ても、結局この問題は改善されなかった。調査者の聴き取り能力が全般的に欠如しているのであれば、X以外の対象者からのデータも十分に得られていないはずである。そこでXとのラポールが形成できない特別の理由があるのではないかと、担当者が問うてみたところ、Aは対象者との関係が、次のような状況であったことをやっとなり語り出した。XにもAにも交際相手はすでにあり、そのことは、面接開始の早い段階で、お互いに話し合った。にもかかわらず、Xは、恋人にするなら日本女性、日本女性の

恋人が欲しいとほのめかし、面接の度にAを誘惑するような発言を繰り返した。そのような対象者に対して、Aは一定の距離をおいて、接するしかなかったと説明した。

事例2 20代のアジア系外国人妻Yに参与観察とインタビューを行ったBのケース

学部生のBは、国際結婚について、個別的の局面での文化的考察を行うために、日本人男性と結婚して日本で暮らしているアジア系外国人女性数名を対象に、エスノグラフィック・リサーチを行った。国際結婚の実態を明らかにするためには、外国人妻に長期的なインタビューをするだけでなく、家庭に訪問して家族の様子や生活状況をつぶさに観察することや、外国人の女性と結婚している夫に対しても聴き取りを行うことが重要である。担当者がそのことをBに助言すると、Bは早速、対象者の家庭を訪問し、夫を交えたインフォーマルなインタビューを行った。しかし、20代の外国人妻Yのケースに関しては、家以外の場で本人にインタビューするだけにとどまった。

その点について、Bは、Yの家は遠くて車がないと訪問できないということと、自分は結婚をした男の人に、結婚についていろいろな質問をするのが恥ずかしいからと説明した。

しかし、BがYをインタビューする場所には、いつも夫が車で迎えに来て、終わるまで外で待っているという。それならば、インタビューの後、一緒に車で家に連れて行ってもらえるかもしれないし、それができなくても、インタビューを早めに切り上げて、Yの夫を交えて一緒に語らうことは可能なはずである。また、Bは既婚男性に結婚について質問するのは恥ずかしいといいながらも、Y以外の対象者の家には、頻繁に出入りをし、対象者の夫から様々なデータを収集していた。担当者が、そうした点を指摘すると、Bはぼつぼつと、Yがどうやら夫をBに会わせたくないと思っているらしいと語り出した。Bは何度か、家を訪問してもよいかどうか、また夫を交えて話がしてみたいと切り出したが、Yは決してよい返事をしようとはせず、その場しのぎの理由をつけて、はぐらかし続けたと言う。

事例3 アジア系の男子留学生Zにインフォーマルなインタビューを行ったCのケース

学部生のCは予てより、日本が植民地としていた

D国の人々に対して、大きな文化的な壁を感じていた。Cはそれを克服するために、D国の出身である男子留学生Zをインフォーマントにして、D国人やD文化についての理解を深めようという目的で、長期的なインタビュー調査を始めた。Zは非常に協力的であった。日本滞在が長く日本語が流暢であったし、日本に対しても友好的であったために、ラポールは短期で形成され、インタビューは順調に進んだ。半年後Cは、膨大なデータを収集し、この研究を始めるまでは、強く感じていたはずのDに対する心理的な壁がなくなり、Dについての理解を一層深めるために、引き続きZをインフォーマントに、調査研究を継続したい意向を自ら表明した。

ところが、春休み明けに、Cは研究テーマを変えたい、対象者を変えたいと申し出てきた。初めはなかなか、変更の理由を述べようとはしなかったが、説明を求めたところ、Zにインタビューをすることができなくなったこととその理由を語り出した。春休みになってCはこれまでのZの協力と友情に感謝し、さらなる協力を求めたところ、思いがけなく、Zから、特別の感情を抱いていることを打ち明けられ、交際を強く迫られた。Zは、Cの交際相手とは何度も顔を合わせていたし、Cがその交際相手との関係を断ち切ったまで、Zとの交際を始めるような状況ではないことを十分理解しているはずであった。いずれにしても、CはZに対する特別の感情が全くなかったため、Zの申し出を丁重に断ったが、Zは何度もCを訪ねて、説得を続け、あきらめようとしなかった。Cは、友達としての関係を続けていきたいとは思いますが、それ以上の気持ちはないと拒み続けた。すると、とうとうZは逆上し、CがZの申し出を受け入れないのは、彼女にD国人に対する根強い差別意識があるからだと一方的に決めつけ、Cが交際を拒むならば、今後研究への協力は一切できないし、二度と親しく口をきくことはない、厳しい態度で拒絶されてしまったことを明らかにした。

3 考察

本節では、初めに述べた二つの研究目的にそって、考察を進める。すなわち(1)女子学生が、民族誌学的研究や語学の個人教授などのボランティア活動、チューターリング、アドバイジングなど、長期に亘るインターパーソナルなレベルで異文化接触を行う際に配慮しなければならない諸点を明確にするために、上

記の三つの事例を、語られざる性の問題、という視点から分析し、(2)マジョリティである日本人研究者＝強者vs.マイノリティである外国人対象者＝弱者という単純な図式には還元できないエスニシティと性の絡み、及びそれ以外の諸々の要因が相俟って、異文化研究者－対象者間に作用する、複雑な権力関係のダイナミズムについて若干の考察を試みることにしたい。

語られざる性の問題

A B Cの三つの事例に共通する、特記すべき事柄は、長期的な異文化研究の中で遭遇した性に関するトラブルが、研究を円滑に進める上での大きな障壁となっていたにもかかわらず、そうした事実が、エスノグラファーである女子学生自身によって隠蔽されようとした点である。

まずAの事例に関していえば、対象者Xの言動がセクシュアル・ハラスメントだったのかという点について、Aは、「すれすれのところだった」と答えている。Xは、「可愛い」と思う若い日本女性に対しては、次々と誰それということなく、軽い遊びの気持ちで誘ったり、からかったり、お世辞を言ったりしていた。そのことに対して罪悪感のかけらも感じていなかったのは、Xがこれまでの経験則から、彼のような若い白人の独身男性の誘いや世辞に対して、「日本女性は決して悪い気はしないどころか、むしろ喜んで群がってくるものである」ということを確信していたからである。Aの場合は、インタビューの度に「また言っている。いいかげんにしたら」と思いはしたが、一個の人間として尊重されることなく、性的な、しかも遊びの対象として軽くみられていることに対して腹立たしいとか、Xに会うのも不快といった激しい気持ちが高じるには至らなかった。しかし、気を許すと、すぐそれにつけ込んできそうなので、表面的な関係に止まらざるを得なかったと言っているのである。

データ収集が思うに任せなかった理由について、なぜ最後まで黙っていたのかという質問に対して、Aは「最終的に、研究の成果の概要を対象者にも報告することになっているが、Xはその結果をとっても楽しみにしている。」それなのに、そこで「対象者が不利になるようなマイナス面を公表するのは、自分の研究のために時間を割いて協力してくれた対象者を裏切るみたいで、申し訳なくてできなかった」と述べている。また調査中、Xの言動に困惑しながら、

Aは一度もXに対して「そういう発言はやめて欲しい」とはっきり伝えようとはしなかった。その理由として、A自身はその場の状況が発言の中止を要請しなければならぬ程深刻ではなかったことに加えて「Xの機嫌を損じするような発言をして、途中で調査研究への協力を断られたら、大変だと思ったから」と説明している。

次にBの場合であるが、Bの研究に協力したY以外の対象者は、日本語も流暢で夫との日本語による意思疎通も円滑にできるし、日本での経済的な生活力があるか、子供があるかのどちらかである。それに対して、Yの日本語は流暢とは言えないし、子供もなければ、日本には係累も、身近な友人も頼れるものは何もない。その上、生活力のないYは、精神的にも、物質的にも夫の愛情にすがらなければ生きていけない状況におかれている。国際結婚をして、言葉もろくに通じない外国で、夫と二人の生活がほとんど唯一の世界といった生活を余儀なくされているYにとって、夫と自由に意思疎通が図れ、同じ民族的背景を共有する若い独身の女子学生の存在は脅威であり、Bを家庭に招き入れ、夫に接近するような事態を極力回避しようとしたことは想像するに難くない。問題はBが、Yが夫と自分を合わせようとする点について、決して明らかにせず、「既婚男性に結婚のことを質問するのが恥ずかしいから」と答えている点である。この点について、後日Bは「Yが本当にそう思っているかどうか、確かめるようなことはできないし、「自分の思い過ぎだったら相手に悪いから、黙っていた」と答えている。

最後のCのケースは心理治療の場面にはつきものの転移感情の表出を見てとることができる。周知の通り、心理治療において、クライアントとセラピストの相互作用の中に生じる正や負の嫉妬、愛情、憎悪、敵意といった転移感情の表出は、日常生活の場面、とりわけ心理的なレベルで援助的な働きかけ(teaching, tutoring, nursingなど)が行われるインターパーソナルな相互作用が発動する過程において決して珍しい現象ではない。転移、逆転移の問題は、留学生や外国人労働者などといった、日本社会の中で孤立状況にある人々との間に信頼関係を構築し、長期的にインタビューを行うethnographerにとっても、決して無関係ではない。したがって、フィールドワークや援助的な働きかけを開始する学生に対して、筆者自身は事前に一定のオリエンテーションを施すことにしている。すなわち、相互作用が深まっ

ていく過程で対象者がエスノグラファーに対して、恋愛感情を示したり、逆に敵意を剥き出しにするようなことがあっても、何ら珍しいことではないし、それ自体、調査者の落ち度ではない。Cがそのことを予め認識していながら、対象者との間に生じた問題をなおも隠蔽しようとしたのはなぜだろうか。

近年、レイプや、セクシュアル・ハラスメントなど、性的暴力や性に関するトラブルによりやく光が当てられ、告発、訴訟などの形で問題が顕在化されることも多くなったが、まだまだ一般的に性に関する問題はタブー視され、個々人の記憶の中に封印されてしまうことが多い。性の問題の難しさは、戦争などの極限状況において無差別に行われる凌辱や幼児に対する性的暴力の類いではなく、それが特定の男女間の一対一の関係性の中から生じた問題である場合に、どちらか一方のみ責任の所在を求めることが極めて困難であり、立証しにくい点にある。被害者はそれを語り出すことによって、過去の屈辱的な体験を揺り起こされるだけではなく、逆に自分の落ち度や責任が問われ、二重の辱めに遭うことになりかねない(福島 1991)。特にCの場合、トラウマティックな被害を被ったわけでもなければ、深刻な事態に遭遇しかけた訳でもない。それゆえにタブーを犯してまで外に向かって告発するほどの強い動機づけもなく、語り出すことによって、逆に響きを買ったり、自己責任の一端が露呈することを回避するために隠蔽しようとしたとも考えられる。

フィールドワーカー自身が遭遇した性に関する体験を語らない、もう一つの理由として、古典的な研究倫理が深く根ざしているとも考えられる。ロサルド(1998)は、マックス・ウェーバーの職業倫理によって形成された、西欧のストイックで男性中心主義的な研究者倫理によって、怒り、か弱さ、欲求不満、憂鬱、当惑、情熱と言った女性的な弱さや、男らしくない状態を分析する可能性が過小評価されていることを鋭く批判し、「人間の感情や欠点からも天職としての学問を構築している【男らしい】自己訓練の厳しい訓練に身をさらすのと同じくらい、社会分析のための洞察が得られるだろう」に、「なぜ自分の視野を、天空から眺める神の目へと狭めてしまうのだろうか。英雄的ではないにしても、同じくらい洞察力に満ちた幅広い範囲のさまざまな分析の位置を、なぜ利用しないのだろうか」(p.255-256)と指摘している。

フィールドワークに従事する女子学生たちにとっ

て、白人男性の性的欲求を充足させるための快楽の対象として最後まで軽く見られ続けたこと、研究対象者の信頼を勝ち得ず、終始対象者の夫婦生活を脅かすかもしれない存在として取り扱われたこと、異文化の壁を越えて相手の文化を少しでも理解しようと奮闘していたにもかかわらず、インフォーマントの逆恨みから「差別的である」と一方的に非難され、調査の継続を断念せざるを得なくなったことは、いずれも、意気揚々と記述・報告できるような事柄ではない。それどころか、それを口外することは、自らの失敗（ラポール形成において）、弱さ、未熟さを露呈することになる。腹立ち、怒り、葛藤、当惑、挫折、不快感などといった感情の表出は、いわゆる客観的で自己訓練が行き届いた研究者倫理に悖る、由々しき事態であると考えがゆえに、抑制されようとするのである。

異文化、性、権力関係

上記の三つの事例に現れた性に関わる問題は、国籍や民族的背景を同じくする男女間においても、生じ得る問題群である。しかし、それぞれの事例を詳細に検討してみれば、そこに民族、人種、国家間の歴史や、今とここのパワー・ポリテクスに、性やそれ以外の、研究者一対象者間の様々な社会的文化的ファクターが絡み合うことから生じる複雑な権力関係の力動を見てとることができる。

まず事例1において、女子学生Aは、在日外国人である対象者を、社会的マイノリティと見なし、この研究を開始した。しかし、実際は対象者の方が、白人であり、男性であるという二重のマジョリティ性を行使し、しかもその上に、「研究に協力してもらわなければならない」、「機嫌を損じてはならない」という必然性から、研究者が対象者に対して毅然たる態度がとれないという逆の力関係が、両者の間に作用している。

対象者Xは日本男性に対しては何ら関心を示そうともしないが、日本女性に対しては特別な性的幻想を抱いている。Aによれば、Xの日本女性像は、「白人女性と比べて優しいし、日本料理を作ってくれる」また、「何でもいいと言って男性に任せてしまう」存在である。つまりXにとって日本女性は、白人男性のXにとって、隷属的で、決してヘゲモニーを脅かされることがない存在であるがゆえに、性的欲望、性的幻想、憧憬の対象となり得るのである。Xは、調査対象者であるという立場を利用して、Aへの誘

いかけを行うことに対して、何ら良心の呵責を抱いていない。そのことは、この調査の結果をXが単純に楽しみにしていることからして明白である。それはAがXの言動に対して、一度も否定的な意思表示をしなかったと言うことにも起因するが、同時にまた「若い独身の白人男性の世辞や誘いかけに対して、日本人女性は喜びこそすれ、決して不快に感じないし、ましてやそれを厳しく糾弾されたり、非難されたりすることはない」という人種的な優越感に支えられた揺るぎない自信、「日本女性はあくまでおとなしく柔順」というステレオタイプに拠るところが大きい。Xの日本女性に対する自信やステレオタイプはむろん単なる妄想ではなく、彼が日本で遭遇した若い女性たちの深層に潜む白人男性に対するコンプレックスや節操のない態度に裏付けられている。しかし、A自身は、自分の中に白人男性に対する憧れ、コンプレックスのようなものはないとはっきり断言する。にもかかわらず、Xの執拗な言動に対して、不快感や怒りの感情を駆り立てられ、激しく拒否反応を示すこともなく、それを軽微なものにとらえていたのはなぜだろうか。

江原(1993)は「からかいの政治学」において、「主婦」や「母」は公的な場で、個別に取り扱われる場合には、性的からかいの対象であることから免れることができる。しかし、「母」や「主婦」ではない女性が、重々しく扱われることは稀であり、接近する場合に気兼ねが少なくとみなされ、より親密性を付与されがちであり、からかいの対象になりやすい。さらに、からかいの行為や言葉は、それが遊びであることを主張するものであるために、通常の社会的責任や非難をまぬがれることができる。したがって、からかいの内容に対して、まじめに批判、抗議しても、そうした抗議は大人気ない行為として失笑を引き起こすか、白けさせる行為や言葉として、沈黙の非難を受けるか、理不尽な行為として怒りや批判を受けるかのいずれかとなると江原は論じている。

AがXに対して抗議や非難の矛先を向けることもできず、Xの言動についてセクハラとは言えない、「ぎりぎりのところだった」と表したのは、Xがセクハラのをしりを逃れるために、巧みに、からかいの形式を利用しているからである。しかし裏を返せば、それは、明らかにXがAを含めた日本の若い独身女性を、一個の人格をもった存在としてとるに足らぬ、劣位のカテゴリーに属する者と規定している証しとも言えるのである。

閉鎖的な職場や言葉が通じない日本の因習的な地域社会の中で明らかに孤立している外国人のXは、集団的場面において、ネーティブであるAに対して、明らかにマイナーな弱者的存在となり得る。しかしXとAとのインターパーソナルな関係性の中に、全く逆の形で現れている構造的な強者と弱者の区分及び力関係は、単なる性の違いによってのみ生じたものではなく、1)白人と日本人との権力関係と、2)性差及び、社会的役割・身分の絡みによって生じる権力関係と、3)研究者-対象者の非対称的な力関係(対象者に機嫌を損じることはできないという研究者の対象者に対する弱み)との複雑な交絡の中で生成され、作用しているものであることは、言を俟たない。

事例2における対象者YとBの間に生じた問題も、日本社会の未婚女性と既婚女性の間で日常的に見い出される出来事であり、決して珍しくはない。しかし対象者YのBに対するリアクションは単に、既婚女性が、年下の未婚女性に対して抱きがちな猜疑心や警戒心、防衛機制的な現れというだけでは十分に説明しきれない大きな経済的、文化的背景がある。

日本の商社マンWは、海外赴任中、アジア系のYに一目ぼれをし、強く結婚を迫ることとなった。Yの方は、言葉もろくに通じなかったし、それほど心をひかれたわけでもなかった。しかし、Wが交際の早い段階で、多額の金品をYとYの家族に贈ったことが、彼女にとってWの愛情の大きさを知る一つの大きな指標となり、家族もWの経済力に圧倒され、さらに経済大国に嫁いでいくということで、娘の幸せを確信したと言う。この結婚がいかに経済、しかも国家間の経済格差、それによって生じる力関係に大きく依拠していたかがよくわかる。言葉も十分にできなければ、これといった技能も資格もないYにとって、外国である日本での結婚生活は、必然的に夫に100%依存して生きるといった形にならざるをえない。そのような無力な状況におかれたYにとって、安定した妻の座を少しでも脅かす可能性のあるものを徹底的に排除し続けるしか、今の豊かな生活を維持する術はない。

経済的な側面に加えて、今一つ考えなければならぬことは文化的な側面である。経済的な力の不均衡は、当然様々な形で文化的な優劣や力の不均衡を齎す。発展途上国出身のYにとって日本は先進国であり、しかも高等教育を受けていない対象者Yにとって、日本の大学で学んでいるBは自分よりもは

るかに優位な存在である。しかも、夫との意思疎通が十分にできず、文化のはざまで、日々もどかしい経験を繰り返しているYにとって、夫の母語や母文化を共有できるBの存在は、脅威となる。ここでは途上国と先進国の経済的、文化的な力関係が、この結婚とその後のYとWとの夫婦間の結びつきに大きく関わっているだけでなく、同性である対象者Yと研究者Bとの対人関係の上にも大きく陰を落とし、その力関係の不均衡が、異性間のBとWの関係作りを著しく阻んでいるという構図を見ることができる。

むしろ対象者Yと同じように、途上国出身で高等教育を受けていない状況ではあっても、Bのもう一人の研究対象者であった妊娠中のVにとって、Bの存在は恐れるに足りぬものである。それどころかVは、同性で独身のBを一人前扱いせず、買い物や遊びなどで外出する度に、自分の都合でBを振り回し、会話も自分のペースでまくしたてて、完全にBの言動を自分の意のままに統制しようとしたため、データ収集が思うに任せないという事態が生じたのである。そればかりか、Vは、悪意はないが、未婚のBをからかうような発言をしたり、Bが求めもしないのに、自分からあれこれと結婚についてのアドバイスをしようとする。YとV、二人の対象者の、Bに対する態度の違いは、単にVとYの性格特性の違いとか、日本語ができる/できないの違いだけでは、片づけられない大きな問題を孕んでいる。

女性というカテゴリーは決して一枚岩ではない。民族、国籍だけではなく、社会によって、婚姻歴や子供のあるなし、年齢、本人の学歴や階級や身分や出自、夫や子供の職業、社会的地位、既往症や障害の有無、外見などによっても限りなく差異化、序列化されている。対象者VがYと大きく違う点は、Vが長幼の序を重んじ、しかも母となる既婚女性を称揚する社会的、文化的価値観の中にどっぷり浸ってきたこと、その彼女がもはや「単なる主婦」ではなく、「母」となるべき地位に昇格した点である。母性を強調する社会通念を所与のものとして受け入れてきたVは、若い未婚女性を劣位のカテゴリーに属する者とみなすと同時に、自らを優位のカテゴリーに属するものと同定する。その非対称的な力関係が、Bに受容的態度、服従を強要するVの権力行為の源泉となるのである。BがVの権力行使に不服を申し立てず、劣位な立場に甘んじたのは、研究対象者の機嫌を損じては研究が継続出来なくなるといけないという理由もある。しかし、Bが20数年にわたって社

会化されてきた日本の「独身者が制度的差別だけではなく、社会的偏見に依然としてさらされている」社会状況（海老坂 1993）が、Bの受容的な態度に多分に反映しているとも言えよう。

最後のCの例では、女子大生Cに拒絶されたことによる強い屈辱感によって、彼女が抛って立つエスニック集団から、過去に民族差別を受けた被害者集団の一員であるというエスニック・アイデンティティの側面が、対象者Zの意識の前面に一気に引き出されたことがわかる。男性中心主義的な考え方を所与のものとする考え方に抛って立つ対象者Zにとって、女性であるCに拒絶されたという事実は屈辱以外の何ものでもない。Cによって劣位な立場におかれたZは、それを個人間の問題として受けとめるのではなく、植民地権力による民族差別の加害-被害の問題として読み替える。さらに男の自尊心を傷つけられたZは、粗暴な言葉によって男性的な権力をCの上に行使しようとする。しかも、フィールドワークを通して、加害者の立場に立つCの中に植民地時代の負の歴史に対する負い目や被害者集団に対する罪悪感の芽生えがあることを知るZは、それを逆手にとって、恋愛において敗北を余儀なくされた一人の弱い個としてではなく、差別を被った民族集団の構成員としての集団的な立場から、加害者側の女性としての一個人であるCに圧力を加え、攻撃しようとするのである。

CとZは、調査研究のある段階までは、大学生同士の、信頼できる気のおけない対話者として対等な関係にあったと言える。しかし、その後、ZのCに対する特別な恋愛感情が生じたことによって、両者の間にそれまであった対等性は消滅する。さらにその恋愛があくまで男性側による一方的なものであり、女性によってその性的幻想が打ち砕かれることによって、たちまち両者間の上に、性差による力関係と歴史的な民族間の加害-被害、被害を告発する集団-告発され謝罪を求められる集団内個人の二重、三重の権力関係が重層的に交差するのである。

4 おわりに

本稿では、異文化研究に携わる女子大生が長期的なフィールドワークにおいて遭遇する性に関する問題の一諸相を明らかにした。フィールドワークに限らず、生身の異文化接触を行う者たちにとって、すなわち表層的な関係だけでは飽き足らず、対象者の

中に一步踏み込んで異文化との相互作用を行おうとする者にとって、性に関わる問題はつきものである。

ここで論じてきたように性に関わる問題は、人種/民族、国家、社会的役割や地位、年齢など、実に様々な社会的、文化的要因と重層的に連動し合い、複雑な様相を呈している。異文化理解のために、様々な文化的背景を持った対象者（外国人、民族的マイノリティ、障害者、犯罪者、病者など）にアプローチし、研究したり、支援活動を行おうとする者たちの多くは、自らをマジョリティ（宗主国民、健常者、援助者、知識人など）と固定的に同定し、対象者とのインタラクションの中で生成され、変化する複雑な権力関係に無自覚、無関心なまま、研究や支援活動を進めてしまっていることが少なくない。そして現実の、一枚岩ではない複雑な権力関係に絡みとられた、女性たちが遭遇する性に関するトラブルは、すでに述べてきたような様々な理由によって不問に付され、葬られてしまうことが多い。しかし、そうした問題に敢えて光を当て直視してこそ、文化と性の絡みや、そこに浮かび上がる権力関係のダイナミズムを再認識することができるのではあるまいか。

異文化研究に携わるエスノグラファーにとって、重層的なアイデンティティの揺らぎを体験する最中で、マイノリティ/マジョリティとは何か、対象者と自己とのどのような関係性の中から紡ぎ出されたデータをもとに、何を、どんな位置から、どう語り出すのかという問題について、深く考えてみることは極めて重要である。

参考文献

- 秋山洋子編訳 1998 『中国の女性学』 勁草書房
江原由美子 1993 「からかいの政治学」 加藤秀一、坂本佳鶴恵、瀬地山角編 『フェミニズム・コレクションⅡ：性・身体・母性』 勁草書房 p.107-130.
海老坂武 1993 「現代のシングル状況」 加藤秀一、坂本佳鶴恵、瀬地山角編 『フェミニズム・コレクションⅠ：制度と達成』 勁草書房 p.241-274.
桑山紀彦編 1997 『ジェンダーと多文化：マイノリティを生きるものたち』 明石書店
関啓子、木本喜美子 1996 『ジェンダーから世界を読む』 明石書店
鄭暎恵 1999 「多文化の中の女性とところ」 『文化とところ』 多文化間精神医学会 p.62-66
トリン、M. 1995 『女性・ネーティブ・他者：ポス

トコロニアリズムとフェミニズム】岩波書店
福島瑞穂 1991 「性はどう裁かれてきたか」中下裕
子、福島瑞穂、金子雅臣、鈴木まり子編『セクシュ
アル・ハラスメント』有斐閣
フックス、B. 1997 『ブラックフェミニストの主張』
勁草書房
マクロビー、A. 1998 「フェミニズム、ポストモダ

ニズムと『本当の私』』『現代思想』Vol. 2, 6-
4, p.129-141
ロサルド、R. 1998 『文化と真実：社会分析の再構
築』日本エディタースクール出版部
Mohanty,C. 1991 *Third World Women and the
Politics of Feminism*. Indiana University Press.